雨の日に小屋で犯されて始まる彼女の夏休み

「小屋があって助かりましたね」

「どうしました・・・？」

「あっ、すいません今ちょうど電話が・・・」
「俺なら大丈夫ですので」
「すいません・・・はい、もしもし」

この屋敷で働いて数日が経った
金持ちの家だけあって掃除に苦労する
彼女の父と母は旅行へ行ってしまい
留守の間、屋敷と彼女の世話を任された

「はい、お手伝いさんは良い方ですよ！
すごく良くしてもらっています
こちらは大丈夫ですので楽しんで来て下さい」
そんなに優しくはしていないけど・・・・
こういうおおらかな所が
とてもお嬢様な感じがする
「はい、では失礼します・・・すいません待たせてしまって」
無防備すぎて何度押し倒そうと考えた事か

『あの・・・・』
「・・・・あっ！はい。いや何でもないです」
『？』
『えーと・・・・もう準備はいいですか？」
『はい、大丈夫です』
「では行きましょう」
これから彼女の日課になっている散歩に同行する

「今日は良い天気ですね」
「そうですね」
（いつも思うけど散歩なのに楽しそうだな
・・・天気が崩れないといいな）

ここら辺は地形の関係で山に雲がかかるらしく
突然大雨が降ったりする
天気予報でも今日は降る可能性が高いらしい

心配は現実となった
「あら、ふってきちゃいましたね・・・」
「どこかで雨宿りしましょう
・・・ではひとまずあそこへ！」
「は、はい」

「ポンプ小屋があって助かりましたね」
「そうですね・・・」
塗れて服の下まで身体が見える

何も知らなそうな態度とは別人のような暴力的な身体
そんな女と二人きり
外は大雨でここの音なんて聞こえない
そもそも歩いてる奴なんて誰も居ないだろう
誰も見ていない

「どうしました・・・？」

「えっ！？いったい何をっ・・・」
彼女は驚いていたが無視して服を剥ぎ取り
今まで溜めてた欲望を彼女にぶつけた

んっ
うっ
ギュ
ズズッ
んっ
ギュ
ズズッ
ゴッ
グッ

ドプッ
ビュ〜〜〜〜!!
ギュッ
ゴポ
ギュッ

「やめっ・・・・苦しいです・・・・」
一発じゃ収まらず
そのまま腰を動かし二発、三発と
彼女の中に吐き出した
あっ
っあっ
ドチュ
ドチュ
ブビッ
ゲプッ

「口を開いて・・・早く」
彼女は無言だったが口を開いてくれた
ゴシッ
ゴシッ

ズボッ
グズ

ムッ ガシッ
ドプッ
ブビュ〜〜〜〜〜
ゴポッ

「そのまま全部飲んで」
言われたまま彼女は口に出された俺の精子を飲む
ん…
ゴクッ
ゴクッ
んぐっ…
全く拒否しない彼女を見て
性欲は収まるどころか高まっていく
飲んだのを確認した後また彼女を抱いた

ゴポポッ
ブピュッ

何時間経ったか覚えてない
この狭くて蒸し暑い小屋で
ずっと彼女を抱いて何度も中に射精した
彼女は気を失っていた

その後、暗くなってからポンプ小屋を出て
彼女お担ぎ見つからないように屋敷へ帰った
彼女の身体を綺麗にしてベットに寝かせたが
その間に目を覚ますことはなかった
明日、俺はどうしたらいいんだ・・・

翌日

「おはようございます、良い朝ですね」

「あぁ・・・おはよう・・・」

彼女はいつも通り挨拶をしてきた

「今日も散歩に行きたいのですが」

昨日の事を覚えてない？いやそんなわけ

「ダメでしょうか」

「い、いえ、もちろん大丈夫だよ、行こう」

・・・どういう事だ？

彼女に言われいつも通り散歩についていった

今日は晴れだった
雲一つない晴天で通り雨の予報も無い
彼女もご機嫌で歩いていた
ただ、気のせいじゃなければポンプ小屋を通り過ぎる時
彼女はそちらを見ていた
そして特に昨日の事には触れず
散歩はただの散歩で終わった

その夜、お嬢様の寝室
「んっ・・・んぅ・・・」

ん…
クチュ……
クチュッ

ん～
ビクッ

「はぁ、はぁ・・・全然届かない」
「・・・違う、こんなんじゃない」

「今日もいい天気ですね」
「そうだね」
あれから特に何もなかった
一度もその話題はしてこない
きっと無かった事にしてくれたのだろう
そう安心していた、ところが・・・

今日は晴れてる
雲一つない
「雨・・・降ってきましたね？」
「え？雨なんてそんな」

「濡れてしまうのであの小屋へ行きましょうか」
「。。。」
彼女の言葉と表情で
ようやく言ってる意味が分かって
俺は彼女とポンプ小屋へ向かった

やけに積極的だ
今まで無垢な側面しか見ていなかったから余計に興奮する
ズリズリ
「では、失礼します・・・」
ぶーぶー♡

喉奥までいれて
苦しそうだが喜んでる
ジュポ
ジュポ
初めてだから上手くはないが
必死にしゃぶりつく姿を見せられて
すぐに・・・
うん♡
んっ♡

ドクッ
ドクッ
ブビュッ
んぶっ

彼女は自分から口の中のものを飲んで
その後、汚れた俺のをモノを舌で綺麗にしてくれた
ナデナデ
ニ
ピクッ
ん
ん

いぢってないのにじっとり濡れてる
フェラしただけでこんなになったのか・・・
彼女が興奮しているとわかり更に高まった

ズブッ
ギュッ
ギュッ
ズブッ
ズブッ
ゴッ
ドッ
ドッ
ドッ
タプッ
タプッ

ブビュ〜〜〜

彼女に求められたやらか
あの日ちりも出た気がする
罪悪感も無く煽たされていた、だが
「あら・・・」
ニチュ～～
ジュ
ジュ
ズチュ～～～～…
ズチュ～～～～
「屋敷に帰ったら
続きをお願いしたいのですが」
「・・・もちろん」
断る理由がなかった

屋敷につくと二人でシャワーを浴びた
単純に小屋での汚れを落とそうとしただけだったが
裸体を見たらまた勃起してしまった
『・・・良いですよ』
その一言と抱きつかれたせいで

ドッ♡
ドッ♡
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ドッ
ドッ
ムニッ
ムニッ

ドプッ
ブビュ〜〜〜

「・・・ではベットへ行きましょう」
ブビュ〜〜〜

シャワーから上がり部屋に入った瞬間
彼女を押し倒してすぐに続きを行った
ズン
ズン
ビクッ
ん…
あっ♡あぁん♡

ドクンドクッ
ブビュ
んぁぁぁ♡
ん…ぢゅぅぅ

彼女は顔をまくらにうずめながら
今まで出した事のない
獣のようなあえぎ声をあげていた
ドプッ
ドクッ
ドクッ
ブビュ〜〜〜
ぎゅ〜〜
ブルッ
ぎゅ〜〜

「あの日の事ですが」
『・・・』
「あぁいえ！責めてるのではなくてですね
あれから身体がずっと疼いてしまって・・・」
「はしたないと思われるかもしれませんが
あの日のように抱いて欲しいのです
力強く激しく・・・」

ズンッ
ん♡
チュプ
グイッ
メリッ
ん…

ズズッ
ズズッ
チュ〜〜♡
ゴッ
ブルッ

ブビュッ
ビュ〜〜〜

（そんな強く抱きしめなくても大丈夫ですよ
そんな事しなくても私は逃げません）
ギュッ
チュ♡
レロレロ♡
チュウ♡
ドクッ
ドク…
ビュ〜〜〜

数日後
「はい、特に変わった事はないです
いつも通りに・・・過ごしていますよ」
ズブッ
ズブッ
「そうですか、まだ当分帰って来ないのですね
では私からお手伝いさんにしばらく居て頂くようお願いします
それでは・・・んぅ」

ブピュッ
ドピュッ
ドポッ
ブポポ

「すいません、電話の間も離れたくなくて・・・ありがとうございます」
食事の後も風呂に入る時も寝る時も
いつでも彼女は身体を求めるようになった
今となっては彼女の方がよっぽど性欲に正直だ

「では今日もお散歩に行きたいのですが・・・」
「はい、もちろん着いていきますよ」
あの日の散歩は今では日課になっている
「嬉しい・・・今日も楽しい日になりそうですね」
おしまい